図書館だより

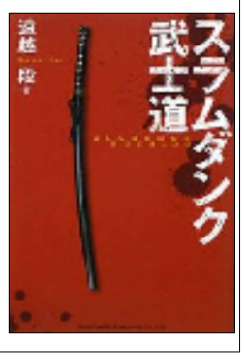
まだ秋の気配が残っているのに、街では色とりどりのイルミネーションがみられ、早くもクリスマスの準備が始まっています。寒くなってくると、自宅で温かくのんびり読書しながら過ごしたくなりますね。「図書館だより」の特集号も、早くも３号目。今回は第２学年の先生方の推薦図書です。先生方からご紹介頂いている本は、高校生の皆さんにとって読んでおくべきものばかりです。ぜひ手にとってみましょう。なお、第一職員室前と図書館前の掲示板には、図書委員がオススメする本を紹介しています。そちらもあわせてご覧ください。

筑波　大

『スラムダンク武士道』

遠越段著　　総合法令出版

みなさんは井上雄彦さんのバスケットボールの伝説的マンガである「スラムダンク」をご存知ですか？井上さんの作品は他にも「リアル」や「バガボンド」などとても素晴らしい作品が多くて私もファンの一人です。中でも代表的な作品である「スラムダンク」は高校バスケを舞台にした作品で、今でもバスケ界で語り継がれるマンガです。この「スラムダンク武士道」は武士道という日本古来の精神論の側面からこの漫画の主人公やキーマンの行動を評価したもので、現代の日本人に欠如した情熱やがむしゃらさのようなものの大切さを教えてくれると思います。スラムダンクファン、井上雄彦ファンならぜひご一読を！



永井　一哉

『「空気」の研究』　　山本七平著　　文藝春秋

高校生にとって友だちの存在は欠かせないものだと思う。しかし、友だちって何だ。生徒と交わす友だち論は何かかみ合わない。もしかしたら、学校生活の中で科学や論理的思考以上に「空気」を学んでいるのかもしれない。そうした思いから、本書を手に取った。

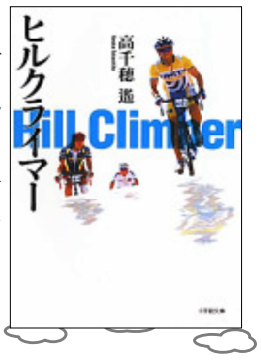
日本社会に息苦しさを感じ、自由を求めるあなたに一読を勧めたい。

松木　久恒

『ヒルクライマー』　　高千穂遙著　　小学館

「登った先には、たしかに何かがある。それが何かを具体的に説明するのは無理だけど、登ってみれば、わかる。絶対にわかってもらえる。」

この小説の中で登場人物が言った言葉です。自分もその何かを知りたくて、今年はヒルクライム大会にいくつも参加しました。



河原　仁

『ピタゴラ装置DVDブック1～3』

佐藤雅彦＋ユーフラテス編　　ポニーキャニオン

「ピタゴラスイッチ」という番組をご存じでしょうか？NHK教育で放送され、さまざまな道具を用いたコースをビー玉やミニカーが進み、ゴールを目指すという、子供向けの番組です。ただ、子供向けと侮ってはいけないところは、慶應義塾大学の学生が試行錯誤の上に作っているところ。身近なところにも物理や数学の考えが転がっていることを気付かせてくれる本です。

寺内　卓也

『ハートブレイク・シティ』

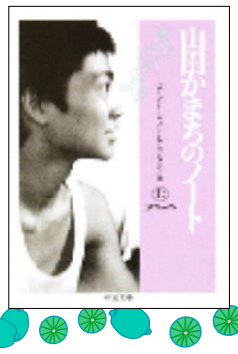
井上淳著　　光文社

ハードボイルドという推理小説のジャンルがある。「卵の固ゆで」の意から、簡潔な文体で現実をスピーディーに描くのが特徴である。元刑事のサムが、退廃した街で起きる様々な事件を解決していく。謎解きよりも登場人物の人間的側面を、特有の小道具、バーボンや紫煙を交えて描く作品である。

※表紙の画像が見つかりませんでした

小林　美咲姫

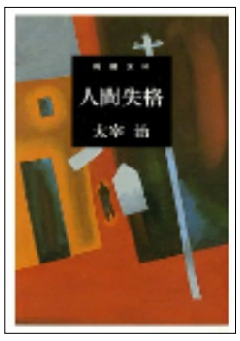
『山田かまちのノート』　　山田かまち著　　集英社



幼少のころから絵画の才能に溢れ、絵画だけでなく音楽にものめり込んでいったかまちの言葉に、「一日２４時間じゃ足りない！」というのがありました。彼は１７歳で亡くなってしまったけれど、その生涯の濃さを想像して、自分でもこの言葉を心から言いたいと、憧れを持ちました。どうぞ、彼の情熱を感じてみてください。

戸井田　翔太郎
『人間失格』
太宰治著　新潮社

「神様みたいないい子でした。」と締められる『人間失格』。はじめて読んだときタイトルからはこんな締めの言葉になるとは思ってもいなかった。自殺未遂、薬品中毒…。３枚の奇怪な写真とともに渡された睡眠薬中毒者の手記に、克明に描かれた陰惨な半生…。太宰治の代表作です。



鶴巻　勝理
『ボッコちゃん』
星新一著　新潮社

ショートショート集。短編小説よりも短い小説で、作者は神様と称される。表題作はオウム返しと語尾変化だけはできる美人のロボットに恋した男の悲劇を描いた。収録されたいくつかの作品はＴＶ「世にも奇妙な物語」の原作にもなっている。日常と非日常が奇妙に入り交じった不思議な感覚が味わえること請け合い。

片山　正男
『意識が変われば世界が変わる』
蔵本天外著　恒文社

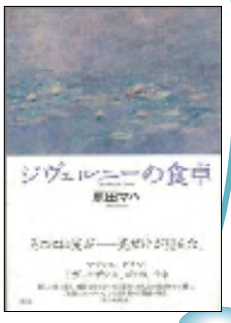
私たちの体にはまだまだ自分自身にもわからない能力潜在能力が眠っています。その潜在能力を引き出させて自分の底力を実感し、願いをかなえたいと思っている人のための本です。ぜひ読んでみてください。

武井　克郎
『ますます眠れなくなる宇宙のはなし
「地球外生命」は存在するのか』
佐藤勝彦著　宝島社

海外に行ったことがないどころか、茨城県もなかなか出ない私ですが、宇宙のはなしは好きです。人類が決してたどり着くことのできない、何百、何千光年も離れた先に、地球と同じような星があって同じような生き物が存在するかもしれない。その可能性について教えてくれます。宇宙のロマンを感じる一冊です。

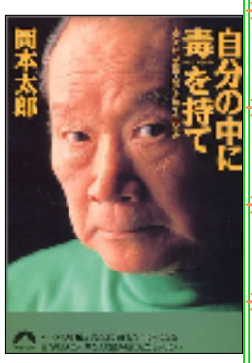
安　めぐみ
『ジヴェルニーの食卓』
原田マハ著　集英社

芸術の秋、この「読む美術館」と言われている本を通して違った角度から画家たちの日常を身近に感じてみませんか。作品の見方が変わりますよ。美のひらめきやひと目ぼれの瞬間を探して、身の回りの小さなものから　空や海に至るまでさまよい、やっと作　品を創り出すことができたときの画家　の喜びが伝わってきます。文字で作品を味わってください。



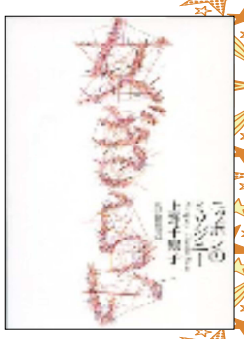
佐藤　知理
『自分の中に毒をもて
ーあなたは”常識人間”を捨てられるかー』
岡本太郎著　青春出版社

「自信はない、でもとにかくやってみようと決意する。その一瞬一瞬に賭けて、ひたすらやってみる。それだけでいいんだ。また、それしかないんだ。意志を強くする方法なんてありはしない。そんな余計なことを考えるより、ほんとうに今やりたいことに、全身全霊をぶつけて集中することだ。」
今まで一番感銘を受けた本です。



若松　暢子
『女ぎらい―ニッポンのミソジニー―』
上野千鶴子著　紀伊國屋書店

「女の子は愛嬌！」「女子生徒だから首都圏でなく茨城県内の大学でいい」「女のくせに料理もできないのか」こんな言葉を耳にしたことはないだろうか。女性だから○○すべきだとか、○○しなければならないなんて、ばかげた考え方に疑問をもっているひとにお奨めの一冊ある。一刻も速くそんな世界でなくなるといいよね。



秋山　康夫
『日本語の宿命　ーなぜ日本人は社会科学を理解できないのか』
薬師院仁志著　光文社

「言葉(単語)」とはものに付けた「名前」だ、という考えがある。すると、日本語に「水」と「湯」があるが英語には「water」しかないことや「頭」は顔が入らないが「head」は入ることを説明できない。事実は逆で、私たちは言葉（単語）で世界を切り取るように見ている、と言えるのだ。だから、「奨学金」を使うと騙されるのも頷ける。

次回は１学年の先生方の推薦図書を紹介します。最終号なのでお楽しみに！